

本棚 ぶらり

テーマ

渋沢 栄一



『渋沢栄一 100の訓言
「日本資本主義の父」が教える
黄金の知恵』

いぶさわけん
渋澤健／著

日本経済新聞出版社 2010年



幼少の頃、家族でアメリカに渡った著者は、渋沢栄一の玄孫（孫の孫）である。UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）でMBAを取得したのちは、外資系金融機関を渡り歩き、独立後、投資会社を起業する。自ら会社を興すにあたって「栄一さんの残した言葉に、何か参考になるものがあるかもしれない」と考えるようになった著者。“日本資本主義の父”の残した言葉の数々は、子孫にどのような気づきをもたらしたのか一。

刊行から約10年。本書は多くのビジネスパーソンの手に取られてきた。選び抜かれた訓言と、一線で活躍する著者自身の解説は、読者が道を切り拓くための羅針盤となっている。

『渋沢栄一「論語」の読み方』

いぶさわえいいち たけうちひとし
渋沢栄一／著 竹内均／編・解説
三笠書房 2004年



実業界の発展だけではなく、医療や福祉、教育の充実を図るなど、渋沢栄一は社会全体の豊かさをも志向する人だった。会社を組織して富を築くことと、公益を実現すること。両立は容易ではなかったはずだ。常人ではなし得ないことに挑戦し、成果をあげることができた理由は、行動の規範としていた『論語』を、高いレベルで実践していたからだと考えられる。本書によって、「渋沢栄一自らが読み解いた『論語』」に触れられるのは意義深い。

話のなかに、同時代を生きた西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通といった幕末・明治の偉人たちが、ところどころ登場する。人物眼に秀でた栄一が、彼らをどう評していたかがわかるのも、この本の面白さだ。

『雄気堂々(上)・(下)』

しろやまさぶろう
城山三郎／著
新潮文庫刊 2003年



渋沢栄一の半生を描いた歴史小説。上巻では、農家出身の青年が、幕末の動乱の中で将軍・徳川慶喜に仕え、時流に翻弄されながらも、家族や友人、恩人、さまざまな人とのつながりを通して成長していく姿が描かれる。下巻では、新政府の高官の職を辞してからの、実業家としての才能を発揮し始める栄一の姿が描かれる。

渋沢栄一という大経済人。興味深く、不思議な人間。その魅力を存分に感じることが出来る物語である。

『現代語訳 渋沢栄一自伝
「論語と算盤」を道標として』

いぶさわえいいち もりやあつし
渋沢栄一／著 守屋淳／編訳
平凡社 2012年



本書の構成は渋沢栄一の自伝『^{あまよがたり}雨夜譚』に依っている。読み手はそれこそ、雨の降る夜、相対する栄一本人から、昔語りをしてもらっているような感覚に浸れる。

栄一には若い時分、そのまま進んでいけば命を落としていただろう瞬間があった。それを回避できたのは運ではなく、「先を見通す冷静さ」が備わっていて、的確に判断できたからだ。この本を読みながら「情熱と行動の人」「天性の勘の持ち主」など、栄一を称える言葉がいくつも思い浮かぶ。しかし彼の遺した数々の功績と後世への影響を考えると、血気と引き換えに命を失わなかったその冷静さに、やはり、並々ならぬものを感じてしまう。

